

ビッグ・アイ コミュニケーション情報紙

i-co

あいこ

BiG-i Communication Paper

The title of our information paper "i-co" is pronounced the same as the Japanese word "aiko," which means here an equal relationship where no one wins or loses. The purpose of this free paper is to offer useful information for everyone, with and without disabilities, with the motto of "Sharing and Caring."

2016

August

vol. 23

「あいこ」は、勝ちも負けもない対等な関係を表す言葉です。「あいこ」は、この分かち合いの精神で、障がいのある人ない人にかかわらずお役に立つ情報を発信します。



i-feature

国内外の障害者によるアート作品を対象とした美術公募展「ビッグ・アイ アートプロジェクト入選作品展 共振×響心」が金沢21世紀美術館にて開催されました。ビッグ・アイとしても初の試みとなった美術館での展覧会には、連日たくさんの方が訪れ、15,000人を超える来場者に作品を鑑賞していただきました。

今号では、展覧会の関連イベントとして開催されたギャラリートーク「個の感覚から生まれる無限の表現」の様子をご紹介します。素晴らしい作品はどのようにして生み出されたのか？障害者のアートに注目が集まる中で、見失ってはいけないこととは？作品の向こう側にある作家の日に照らしながら考えます。

日々のカケラ



個 の 感 覚 か ら 生 ま れ る 無 限 の 表 現



作品に映り込んだもの

鈴木 本日はお集まりいただき、ありがとうございます。最近では、障害のある方々のアートが注目され、作品の評価が高まるとともに、支援の輪も広がりを見せてきました。そうした中で作品が注目されること、社会の中で認知されることは喜ぶべきことですが、作家の方たちを置いてきぼりにはできません。彼らがどのように、この素晴らしい作品を生み出したのか？彼らの表現の核となるものは何なのか？彼らが過ごす日々の時間、居場所、もっと広く考えれば、今生きている社会の流れ。見えないものから受け取る感覚が表現の核となっているかもしれません。このギャラリートークでは、作家に焦点を絞って皆さまと一緒に考えていきたいと思っています。それでは秋元館長、よろしくお願いします。

秋元 はい。それでは話のきっかけとして、まずは展覧会の感想から聞いてみたいと思います。中津川さん、いかがですか？

中津川 僕はビッグ・アイの展覧会を見て3回目なんですけど、今回作品の応募数が1,500点以上なんですね。そこから選ばれたのは97点。そうした競争率を含めても、かなり作品のクオリティは上がっているし、狭き門になっていると感じます。僕は審査の時に海外からの作品を見たんですが、例えば韓国の方の作品にソウルの街を歩いた時に見かけるような色使いがあるように、その土地その土地の環境や社会状況など、いろんなものが作品の中に映り込んでいるんですね。そういうところも含めてすごくバリエーションが豊かな展覧会になったなと思います。

秋元 展示についてはいかがでしょうか？今回、大阪から始まり東京と横浜でやって、この金沢に来たんですね。それぞれの場所の違いはありましたか？

中津川 そうですね、例えば東京はBunkamuraという渋谷でも繁華街の中心にあるギャラリーだったので、やはりお客さんにはショッピングのついでに立ち寄り人だったり美術や文化に関心がある人が多かったのですが、新横浜にあるラポールという施設は

障害者のスポーツ施設なので、来る人の99%が障害のある人と関係しているように見受けられました。美術館やギャラリーになかなか出かけられないような車いすの方が、作品を食い入るように見ている様子がとても印象的で、そうした場所でこの展覧会があるというのは素晴らしいことだと思います。

そしてこの金沢21世紀美術館なんですが、天井が高くて、作品の見え方が普段と全然違うんですね。美術館って実はとても怖い空間で、作品の良いところと悪いところがかなり露わになってしまうんです。ただ、そんなところに展示しても遜色がないどころか、良さが引き立つ作品が集まったなと感じました。

秋元 そうですよ。私も驚いたんですが、いい作品があるなとあらためて感じました。国枝さんはいかがですか？

国枝 ビッグ・アイの展覧会は過去3回見たことがあるのですが、その中でも一番個性が強いクオリティも高いなと感じました。一点一点油断して見ると気を全部持って行かれそうなくらいの迫力があって、何かをアピールしたい、訴えたいという力がヒシヒシと伝わってくるように感じます。

ビッグ・アイの公募展では一昨年とその前の年に審査員賞と入賞をいただいて、そのご縁から今回この展覧会で金沢アート工房からも作品を展示させていただいたんですが、会場をぐるっとまわってからアート工房の展示スペースに来ると、やっぱり全然違うなと、地域や国によって作風とか訴えるものが違うんだなと感じました。

明確な表現 欲求

秋元 障害者アートを掘り下げるきっかけとして、実際に展示されている作品を頼りに話をしていこうと思うのですが、何かこの作品について話しておきたいという作品はありますか？

中津川 僕だったらマリリン・ウォンさんの作品ですね。何かイメージを描いてるんだけど、

展覧会場と会期

大阪 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ) 2015年11月17日～11月23日

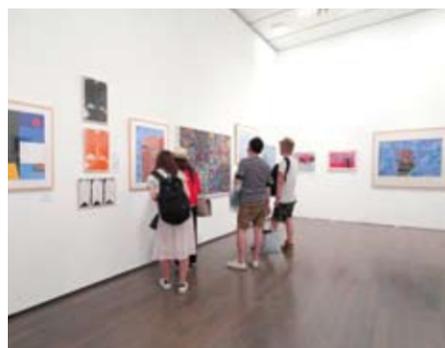
香港 賽馬會創意藝術中心 L1藝廊 2016年3月3日～3月9日

東京 Bunkamura Box Gallery 2016年5月2日～5月9日

横浜 障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 2016年5月11日～5月15日

金沢 金沢21世紀美術館 市民ギャラリー B-2・4 2016年5月17日～6月5日

大阪 ハービスHALL 小ホール 2016年8月9日～8月13日



それが全部丸を集積しているようなイメージを作り出してるんですよね。それぞれが具象的なアウトラインを作るっていう視覚的なものじゃなくて、作家が感じてる世界というものを、かなり掘り下げて表現しているなと感じました。多分中国系のアメリカ人だと思うのですが、ヨーロッパ的な中でも東洋的なイメージがあったり、いろんなものがクロスオーバーして生まれた作品だなという感じがしたんですね。



Marilyn Wong「The Woman A Model, 2014」「Tiger, 2015」「Chinese, 2015」

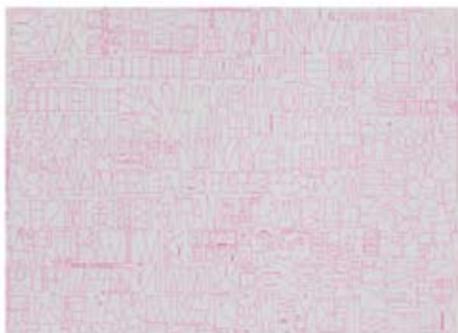
秋元 作家のバックグラウンドを反映したユニークな作品ですよね。先ほど楽屋での話なんですけど、障害者アーティストの生み出す表現って美術的にバリエーションが豊かというか、美術史上に出てくる表現が全部出ちゃってるよねって話をしたんです。これなんかはまさに抽象的な現代アートにある表現ですよね。

中津川 イメージ的にはちょっと、テリー・ウインターズに近いですよね。黒の使い方が本当に絶妙で、黒を使ってからまたその上で白を使ったりして、立体感をつけるために黒をすごくうまく使ってる。これって学んでもできないような、かなり根源的なものに近いところもあるんですが、それが絵としてすごく成立しているなって感じがします。

秋元 中津川さんに聞いていいのかわからないけど、かなりの数の作品をすでに描いてるでしょ？

中津川 描いてますよね。多分、すごく多作な方じゃないかと思います。表現に対する欲求みたいなものがピンピン伝わってくるように感じます。

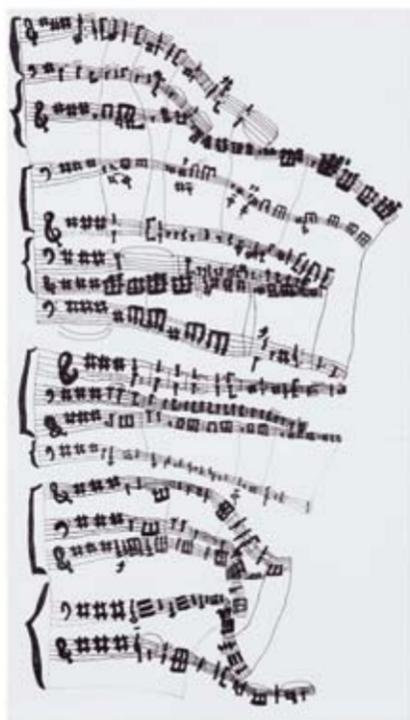
秋元 周りにいる人たちが、はじめは、作者に描ききっかけを与えたりしてるのかもしれないけど、この絵を見てると受動的に描いてる訳ではないんだなって思いますよ。これなんかはまさにその表現欲求をはっきり持って描かれた作品だなというふうに思い



平野喜靖「無題」



竹内知「撒き散らされたもの」



高橋朋之「モルダウ・スメクナ・がくふ」

ます。国枝さんが気になった作品はありますか？

国枝 私は2点あって、音符の作品とグレーの地にピンク一色で描かれた作品ですね。色は単色なんですけど、全体のバランスがすごくかっこいいんです。何かの表紙やジャケットにそのまま使えそうなくらいのデザインセンスがあって、ずっと見ていられる作品なんです。あともう一つ言えば、アート工房から竹内知(たけうち さとる)さんの作品ですね。モチーフは少女で、その周りに彼女の風景とか環境といったものを表現した作品なんですけど、じっと見てると気迫というか、伝わってくるものがありますね。

日々の生活の中で

秋元 今こうして作品を見てはいるわけですが、お二人は出来上がった作品だけを見てはいるわけではなくて、作家が日々作品を生み出していく現場を共有されておられますよね。そうした中で感じることや発見したこととか、何かエピソードがあればお聞きしたいのですが、いかがでしょうか？

中津川 奥の壁に濃いオレンジと黄色を使った作品があるんですけど、工房集の前田貴(まえだ たかし)さんの作品なんです。彼はもともと絵が好きだったんですけど、10年間くらい他の施設にいて描けなかったんですよ。それで工房集に来たらものすごい勢いで描き出したんです。形式を見るとセルジュ・ポリアコフなどフランスの戦後のサロン・ド・メの画家、いわゆるモダンアートにすごく近いんです。当然彼はそれを全く知らないんですけど、写真を見てそれを全部自分で分解して再構築するっていう、方法的にはモダンアート画家と同じことをやってるんですね。彼はなぜそれをしてるのかっていうと、自分の見ている世界に近い世界をそこでそのまま表現しているんですよね。



前田貴「青春号」

秋元 近い世界ですか。

中津川 そうなんです。自分の世界そのものを表現するために再構築をしているということは、多分写真を見ても僕らとは違ったように感じてるんだなっていう気がするんですね。それから彼は表現して形になることへの欲求がすごく高いので、僕が行っても誰が来ても自分の作品を持って来て、「見て、見て」ってすごく積極的なんです。今はどんどん身体がしんどくなっているんですけど、描くことに対する欲求は逆にどんどん高まっているんですよ。そういうのを見ると本当に自己肯定というか認知というか、作品が社会に出ていくことによって、自分がすごく肯定されているのを感じているんだなって思います。

秋元 今のお話にて我々とは違ったように感じてるって話がありましたけど、それがどう見えてるのかってちょっと気になりますよね。我々どう違って、逆にどう一緒なのかなって。無理やり頭をひねって作ってるわけじゃなくて、かなり自然に見てるものを表現してるんじゃないかっていう話なんですけど、そのあたりも含めて何かエピソードはありますか？

国枝 そうですね、例えば浅田真央とか松坂大輔の大きな作品を作ってる細川陽平(ほそかわ ようへい)くんなんですけど、彼がモチーフにするのは本当に小さな新聞記事であったり、写真を見て描くんなんですけど、絶対あんなふうには映ってないんですよね。当然手前に浅田真央がいて、奥の方に観客がいるなっていうのは写真でもわかりますが、



秋元雄史(あきもと ゆうじ)
東京藝術大学大学美術館館長・教授/金沢21世紀美術館館長
1955年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科卒業。
1991年よりベネッセアートサイト直島のアートプロジェクトに関わる。
2004年より地中美術館館長、ベネッセアートサイト直島・アーティストディレクターを兼務。2007年より金沢21世紀美術館館長。「金沢アートプラットホーム2008」「金沢・世界工芸トリエンナーレ」「工芸未来派」等を開催。2015年より東京藝術大学大学美術館館長・教授を兼務。ビッグ・アイアートプロジェクトでは審査員を務める。



中津川浩章(なかつがわ ひろあき)
美術家/アートディレクター
記憶・痕跡・欠損をテーマにブルーバイオレットの線描を主体としたドローイング・ペインティング作品を制作。画家として国内外での展覧会多数。
障害者のためのアートスタジオディレクション、アールブリュットの展覧会キュレーションに多くたずさわる。あらゆる人を対象としたアートワークショップ、ライブペインティング、講演、執筆など、アート、福祉、教育とさまざまな分野で社会とアートの関係性を問い直しながら活動を行っている。



国枝千晶(くにえだ ちあき)
金沢アート工房代表
優れた芸術感覚を持つ知的障害のある方、精神に障害のある方を発掘するとともに、創作に打ち込める環境や発表の機会を提供。作品を介して社会との接点を導きだすことから、ひとりのアーティストとして自立するための支援を行っている。
ビッグ・アイアートプロジェクト作品募集においては、細川陽平「バッテリー」(2013年上田バロン賞)、竹内知「撒き散らされたもの」(2014年エドワード M. ゴメズ賞)、高峯梨紗「小さきあやかし」(2014年秋元雄史賞)など、強烈なインパクトを残している。

観客の表情なんて読み取れるわけではないんです。でも彼にはちゃんとこの人はこんな顔で、この人は演技に対して怒ってるみたいなところが見えてるのかなと思うんですね。

秋元 表情が見えちゃってるんだ。

国枝 そうなんです。見えてるから全体の構図自体も彼の頭の中でもう仕上がってるわけですよ。普通描く順序としては、一番メインになるモチーフを描いてから後ろを描きこんで行くってというのが多いと思うんですけど、いきなり観客の耳ぐらいから描き始めて、何を描いてるのかずっと見ると、最後の方になって浅田真央らしき人物が出てきたりするんです。

秋元 全体のあたりってというのはあるんですか？

国枝 ないです。

秋元 いきなり真っ白いところに描くんですか？

国枝 そうなんです。指先から描いていく時もあるし、どこからスタートしても出来上がってくるんですよ。

秋元 頭の中ではほぼ見えてるんだね。

国枝 見えてますね。それから、アート工房に9年間ずっと通ってくれている人の話なんですけど、その人はもともと家でずっとひきこもりの状態で、その頃から作品は描いてたわけなんですけど、非常に暗い作品が多かったんですね。お母さんが彼をアート工房に連れて来てくれた時には、話しかけても目も合わせてくれなくて、そんな状態が半年くらい続いたんです。それがだんだん慣れて来て、一人で自転車に乗って通って来るようになったんです。そうすると彼にも周りを見る余裕が出てきたんですよ。最初は彼らしき自画像が一つあって、周りが真っ暗になっているという作品が多かったのですが、それにだんだん道ができて、家がぼつんぼつんと建って、樹木ができて、何人かの人物が登場して、色がだんだん鮮やかになっていきました。ああ、世の中はこんなにも明るいものだったんだなって彼自身気づいたんじゃないかって、本人に聞いてみないとわからないんですけど、確かにそういう変化が出てきている人もいます。

あとはやっぱり家族が作家さんに対して理解を持っているか持っていないかで作風がごろっと変わってきます。家族が理解し協力している人の作品というのはどんどん良くなって来ています。家族との折り合いが悪くなっている人もいますが、そういった人の作品は残念ながら停滞ぎみになっていく傾向がありますので、決して自分の内面だけでわき出したものを表現してるんじゃないで、私たちと同じように周りの環境というものに大きく左右されているんだなっていうことを感じています。

変わりゆく作品があらわすもの

秋元 これまでのお話の中でかなり重要なポイントがいくつか出てきたかと思います。一つは作品を好き勝手に描いているというよりは、その人の気持ちなり状態なりを反映したものだということ。そういう意味では非常に生(なま)というか本人と密接な関係があるということですね。もう一つは時間的な経過をたどると作品が変化してきているということ。本人の気持ちや置かれた状態が改善したり、そうじゃなくなったりもあると思うけど、それが反映して作品の世界をつくっていると。単なる自己表現じゃなくて、我々もそう



細川陽平「浅田真央」

やって生きているように、非常にヴィヴィッドに社会や人との関わりを感じてるってことなんだと思います。どうしても単純に、ある種神話的に障害者のアートをアウトサイダー・アートとかアール・ブリュットって言って、何か珍しいものみたいな感じにとらえがちなんですけど、それは我々の世界と同じというか、リニアに連続してつながってる世界だし、もう少し視野を広げて見ていけば、当然イメージできるだろうというふうに思っています。これは障害者アートの社会的な役割というか、福祉的な役割であったり、教育であったり、人間の尊厳の問題にも関わってくるので、話を広げていきたいと思うのですが、いかがでしょうか？

中津川 そうですね、例えば時間とともに変化していくってことはやっぱりあって、一般的な傾向として自閉症の方は反復した絵を描くみたいな話があるんですけど、僕が関わってる工房集の大倉史子(おおくら ふみこ)さんなんかは、平面的な絵を描いている画面の中で急に立体的なとらえ方でものを描いてみたりとか、それが今7年くらいかけてつながってきたりとか、そういうことがあるんです。

秋元 見方が変わっちゃったのかな？

中津川 変わったって言うよりも多角的になったって言うか…、実際に一人だけじゃなくて、尾崎翔悟(おざき しょうご)くんっていうちょっとイラストチックな楽器を描く人がいるんです。その人なんかはわりと平面的に、ちょっとバスキアみたいな悩ましいタッチで描いてたんだけど、誰も教えてないのに今は一点透視図法のようにも見える方法を使って描くようになってきたんです。多分写真も見てるだろうし絵なんかも見てるだろうし、そうした中でいろんな情報を自分なりに組み立てて、それを表現しているんだなって思います。

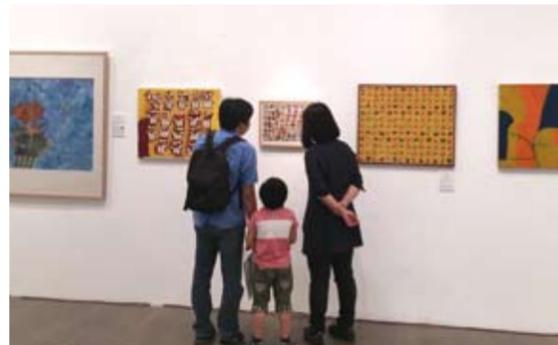
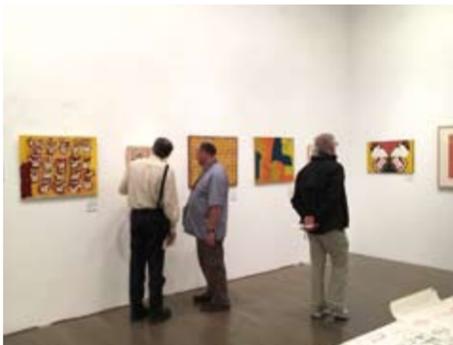
秋元 傾向的にこうだって単純化しない方がいいんだね。常に多様な要素が入ると言うか。

中津川 その大倉さんも尾崎さんも言葉での表現が自由にできるわけではなくて、だからその人が何を考えてるのか、コンセプトとしてはなかなか見えてこないんですよ。だけど10年くらいずっと見ていると、これこそをコンセプトと定義するべきだっていう、そういうものを感じるのです。作家さんが生きてるその生のカタチが結晶化されて現出していることが感じられて、そこには当然社会が映り込んでるんですけど、読み取る側がそういうふうに見ないと、彼らの作品はアール・ブリュットだからこんな表現なんだってというようなクリシェ的な価値観に回収されて行ってしまうんですよ。障害者であるとかじゃなくて人間は社会的な存在だから、やっぱりその社会の反映っていうのにはいろんな意味があると思うのです。それを見る側が読み取っていくって言うところもとても必要だと思います。

秋元 これは二次障害という言い方をしているのかわからないんだけど、やっぱり先天的に持って生まれた障害とは別に、暮らしていく中で置かれた環境とか、与えられた場みたいなものの中で、より厳しい状況に置かれちゃうこともあると思うんですね。作風や作家の気持ちが開かれていくっていうのは、ある意味ではそれまで抑圧されていたものが解放されていったみたいなこともあるだろうと思うんです。そういったところで何かエピソードみたいなものはありますか？

中津川 そうですね。最初に工房集を立ち上げるきっかけになった横山さんっていう女性がいるんですけど、いろんな美術館で展覧会をしたり、かなり活躍している人なんです。それが何で表現活動をするようになったかという、他の仕事ができなかったんですね。ウエス作業というのがあって、ぼろきれをはさみで切って、工場でするんですけど、そういう仕事もできなかったんです。何か他にできることはないか探しあぐねていたんだけど、絵だけは描いてくれた。じゃあ不可能かもしれないけど絵を描くことを仕事にするしかないということになって、表現活動をはじめたんです。それからその人がとてもおもしろい絵を描いていることで注目されて、幸せになっちゃったんです。すごく幸せに。そしたらもう今は以前ほど絵を描かないんです。工房集に来ると

力強く自由な作品に心が軽くなったという人や、創造の原点を知ったと語る人、様々な人が訪れた展覧会場。作家の日々とする人の日々が交わる瞬間。



自分の席に座ってずーっとニコニコしてるんですね。ちょっと思い出した時にしゃしゃっと描いて、だから絵としてのクオリティは落ちてるのかもしれないんですけど…。

秋元 本人はもう幸せなんですね。

中津川 親御さんもすごく幸せだっておっしゃっていて、そういうのを見ると何か、素晴らしい作品を描くことだけが良いことではないなって思います。

秋元 それはもう描けとは言えないよね。

中津川 そうなんです。だからアートの見たら違う価値なんだけど、福祉的に見たら、多分そちらの方がスタッフもいいよねって。

秋元 そうですよ。今、障害者アートを取り上げていくっていう機運があって、アート作品としてのユニークさとか、それを評価するということもそれはそれで大事なことだと思うんですね。マーケットの中で値段がついて作品が売れていけば、それが生活のなにながしかを構成するわけで、それはすごく大事なんだけど、一方で今の話にあったような福祉的な、アートセラピー的な役割もあるんだろうと思うんです。どっちか論争みたいになりがちだけど、それはどっちかってわけじゃないんですね。

中津川 そうですね。両輪あっていいし、多分僕達が望んでそうなるっていう感じじゃなくて、彼らが表現活動していると自然にそうなっていくんじゃないかと思うんです。画材の話になるんですけど、結構みんなこだわりがあって、退色しやすい水性ボールペンで描く方もいるんですね。だから三年経ったら色が消えちゃうよって言うんですけど、やっぱりそれを選んじゃう。

秋元 それがいいんだよね。しょうがないですよね。

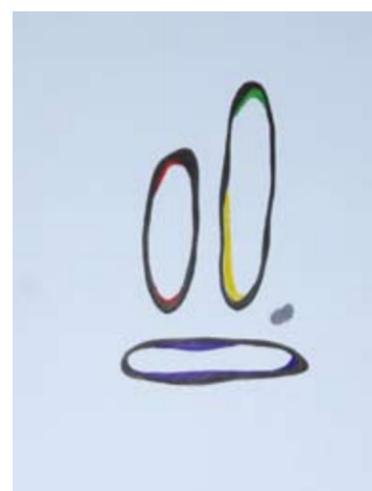
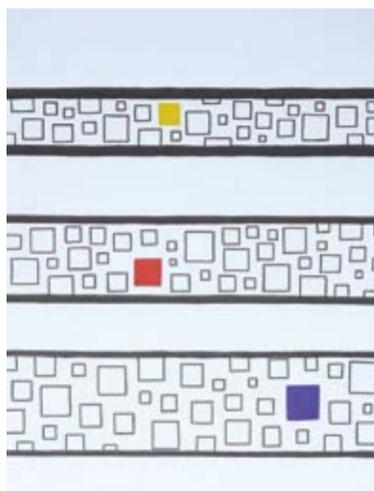
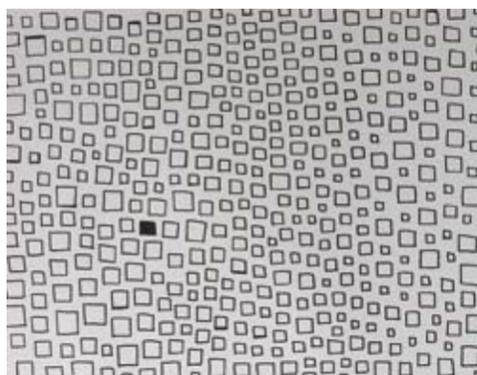
中津川 しょうがないんですよ。それにプリミティブなアートって作品として残ることのないものってたくさんあって、チベットの砂絵曼荼羅やアボリジニの砂絵やアフリカのボディペイントなども。障害者の人たちの行為を見てると、アートの本質的なところを僕らは逆に勉強させてもらっているような感じがありますね。

秋元 そういうライブな、美術がまさに生まれてくる時間そのものが一番アートだと言えるわけで、そういうのだけでもいいという選択もあると。何ていうか柔軟性みたいなものが付き合う側に要求されますよね。

中津川 そうですよ。だからアートの知識よりは、障害の理解も含めて人間に対する知識や経験を持っていないと、とんでもないところに導いて行っちゃうんじゃないかって思うんです。アートだけの価値観で関わりと、水性はだめだから油性で描きなさいみたいになっちゃって、それが原因でいやいや描くことが、はたしてその人にとって良いことかって考えると、やっぱりそうじゃないと思うんです。ただ時に工房集では少しだけ負荷をかけ負けん気を引き出したりすることもあります。もちろん、信頼関係がないと出来ないことだけど、そういうところでちょっと気分を変えてみる？みたいな感じにすると、それで変わっていくところもあったりするんです。だから全て彼らのイニシアチブでやっていくというよりは、関係性の中で…。

秋元 コミュニケーションなんですよ。お互いのやりとりの中でってことですよ。国枝さんはどうですか？

国枝 そうですね、中津川さんのお話と重なるところがあるんですが、アート工房に高橋雅（たかはしまさり）くんという子がいます。工房活動をしている松ヶ枝福祉館というところがあって、そこに彼がいきなりやって来たんですよ。スケッチブックを十何冊も持って来て、作品見てほしいって。見た目がすごく怖いんですよ、本人の。あの時は髪をモヒカンみたいな感じにして、ただ作品自体はおもしろかったんで、工房に通って来ることになったんです。創作の様子を見てると、3時間の間にとにかく何十枚も描き上げていくんですよ。それがあつからしばらく来なくなって、あいつどうしたのかなと思ってたら、またぼつと来て彼女とベルギーに行ってきたって言うんです。え？ベルギー行って



高橋雅「ひとり」「ふたり」「さんにん」「もうすぐよにん」

きたの？彼女できたんだ！って感じで、それから作品の色使いが明るくなってきて、曲線が増えてきて、何かいい感じになってきたなと思ってたら、またしばらくして結婚しましたって。最初に「ひとり」っていう作品があったんですけど、結婚して「ふたり」っていう作品になって…。

秋元 ふたりになったんだ。

国枝 次に子どもさんもいれて「さんにん」という作品ができて、最近できたのは「もうすぐよにん」。

秋元 もろに自分の人生を反映してるんだね。

国枝 その後、3月にここで作品展をさせていただいた時に、もうすぐ作品展やるから新作どんどん持ってきてよって言ったら、作ってないんです、作品を。

秋元 もう作ってないの？

国枝 今は作ってないです。子どもがかわいくてしょうがないみたいです。幸せになっていってるんだなと思って、それもまたしょうがないということになりました。

秋元 お二人の話聞いてると、だんだん幸せになるとやめちゃうのかな？

中津川 健常の人でも若い作家さんとか、すごい絵を描いている人が売れて幸せになっちゃうと、作品が形式化してつまなくなっちゃうたりとかもありますもんね。

秋元 そうですよ。だから、良いか悪いかは別にしても、表現活動に力が入ってる時って、現実の中で抵抗を感じてることとか、うまくいかないこととか、乗り越えたいものがあるって、それを代理にするようなところもあるのかもしれないですね。

社会とつながる仕事

秋元 ちょっと話が変わるんだけど、作り終わった作品に執着しない人もいれば、先ほどのお話にもあったように、自分の作品を持って来て人に見せるという人もいますよね。作品に対する距離感というか、自分の作品との関係ってどんな感じなんでしょうか？

中津川 それも健常者と同じだと思うんです。ある意味では執着もするし、描いたら終わ

工房集

埼玉県川口市にある障害者施設であり、社会福祉法人みぬま福祉会のメンバーの表現活動を社会につなげるプロジェクト。「そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いをこめて、「集(しゅう)」と名づけられた。表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、人と人を豊かにつないでいる。



りで作品が評価されることにあまり関心がない人もいます。ただ、一見そのように見えても、作品が評価されることで親御さんが変わったりスタッフがかわったりするのを感じて、積極的に表現するようになる人もいますよね。

秋元 周囲の人たちが喜んでくれているとか、そういうことはやっぱり感じてるんだよね。だからかなり社会的に描いてますよね。何となく絵を描くことって孤独で、自己完結しているような作業に見えるけど、実はそうではなくて描くことを通して周辺と関わってくるし、こういった展覧会を通して不特定多数の人たちと関わって行って、それがまたフィードバックされているんですよね。

中津川 そうなんですよ。だから工房集では表現活動を仕事としてとらえてるんです。正直いうと今日は描きたくないけど仕事だから頑張って描くぞ、みたいな人もいますよね。

秋元 なるほど。もう仕事なんだね。

中津川 でもそれを乗り越える時ってあるんですよね。僕らもそうなんだけど、好きだけで描いてるだけじゃなくて、半分義務くらいの感覚で描くと壁を乗り越えられて、それが社会的な役割を担うということもあるので、それも健常の人と同じなんだなって思うんです。

秋元 単に好き嫌いで描いてるというよりも、それ自体がルーチン化して仕事みたいになっていくと、それが社会と関わっていく一つのメディアとして開かれていくってということもあるってことですよ。

中津川 そうなんですよ。そうすると作品も変わるし、その瞬間に本当に作品が社会化していくのですよ。

秋元 国枝さんも必ず展覧会をやるじゃないですか。そのあたりはやっぱり意識してるんですか？

国枝 そうですね。一年に一度、3月くらいに作品展をやらせていただくんですけど、普段の工房活動はわりとんびりしてるんですよ。それが、作品展があるのでそろそろ制作お願いしますねって言うと、急にピッチが上がるんです。自分の作品が公に展示されるっていうのは、なかなか表情には表れてこないですけど、やっぱりうれしいんじゃないかと思うんです。

秋元 私も国枝さんとこの活動を知ったのは展覧会の時なんですよ。たまたま散歩してる時に展示してるのを見て、入ってみたら絵も充実してるし、金沢にこんな活動してる人がいるんだなって強い印象を受けたんです。そういう意味でも大切な、人とつながる接点として展覧会があるんだろうと思います。

そういったところで時間もやってまいりましたので、最後にこの展覧会の主催者を代表して、ビッグ・アイの鈴木さんに一言いただきたいと思います。

鈴木 ありがとうございます。お三方のお話にもあったように、障害のある方々のアートに注目が集まり、その評価も高まっていますが、そうした中ではどうしても作品自体に注目が集まりがちになってしまいます。ビッグ・アイとしては美術的な価値を評価すると同時に、美術としての価値が高まった時に作家本人が本当に幸せなのか、社会の中で生きづらさを感じていないかということも絶対に見ていかないといけないことだと思っています。

今回初めて美術館で展示させていただきましたが、こうした美術的な視点で見ただけのような場所でもやりますし、横浜ラポールのように車いすの方が行きかうような場所でもビッグ・アイはやっていきます。その両方をしっかりと見ていただけるような展覧会にしていきたいと思っておりますので、また皆さま応援のほど、よろしく願いいたします。



《概要》

ビッグ・アイ アートプロジェクト入選作品展 共振×響心 日々のカケラ(金沢展)
会期:2016年5月17日(火)~6月5日(日)
会場:金沢21世紀美術館 市民ギャラリーB-2・4
主催:国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)
協力:金沢21世紀美術館、金沢アート工房
後援:文化庁、石川県、金沢市、金沢市教育委員会、北國新聞社
助成:公益財団法人野村財団、公益財団法人花王芸術・科学財団

ギャラリートーク「個の感覚から生まれる無限の表現」

日時:2016年5月21日(土) 14:00~15:30

コーディネーター:秋元雄史(東京藝術大学大学美術館館長・教授)

ゲスト:中津川浩章(美術家、アートディレクター)、国枝千晶(金沢アート工房代表)

司会:鈴木京子(国際障害者交流センタービッグ・アイ 事業プロデューサー)

ビッグ・アイアートプロジェクト 入選作品展 香港 × 響心 in 香港

会期：2016年3月3日（木）～3月9日（水）

会場：賽馬會創意藝術中心 L1 藝廊 LI Gallery, Jockey Club Creative Arts Centre

主催：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）

共催：社區文化發展中心 Centre for Community Cultural Development (CCCD)

助成：公益財団法人野村財団

ビッグ・アイアートプロジェクトにとって初めての海外展が香港で開催されました。

この展覧会は、障害者を含め社会の中で生きづらさを抱える多様な人が、芸術を通して社会参加や自己実現を果たすとともに、社会的価値観を変えることを目的として活動しているCCCDとの共同作業によって実現しました。

一年近くかけた展覧会制作では、言葉や文化の違いから作業が遅れたり、止まったりすることもありますが、時間をかけて話し合い、互いに理解を深めることができました。

オープニングセレモニーには、日本から2名の作家が出席し、香港からはCCCDが支援する作家さんの他に、香港で障害者のアート活動を支援する団体やそこに所属する作家さんたち、個人で活動している作家さんなど、たくさんの方に来ていただくことができました。

自身の作品の前で満面の笑顔で記念写真に収まる作家さん、それを笑顔で見守る支援者のみなさん。遠く2500キロ離れたところでも、表現したい、伝えたい、分かち合いたいという思いは同じだということをおぼやめ感じた時間でした。

ここでは、CCCDの莫（モク）さんからいただいたメッセージをご紹介します。

ビッグ・アイ、そして長きにわたってビッグ・アイが行ってきた事業のことは以前から耳にしておりました。ビッグ・アイの建物が大阪の郊外に位置し、非常に交通アクセスが良いということも聞き及んでいました。また、ビッグ・アイが運営・促進してきた芸術活動や芸術祭についても以前から存じておりましたので、ビッグ・アイ初の海外展である「ビッグ・アイアートプロジェクト入選作品展 共振×響心」を共催できることは、大変光栄なことでした。

ビッグ・アイ主催による5回目の作品募集と展覧会のため、障害のある方々の芸術作品を香港だけではなく、ブラジルやネパールから募集するお手伝いできたことは、私たちにとって非常に嬉しいことでした。

今回の展覧会に香港のアーティストの作品が数多く選出されたことを非常にうれしく思っております。障害のある方々による芸術作品の展覧会が香港になかったわけではないのですが、今回の展覧会に入選した50の作品は非常にクオリティが高く、障害のあるアーティストの素晴らしい才能を示すものでした。

数々の才能が見いだされましたが、彼らに対してさらなる活動の機会を提供するというビッグ・アイの考えに私たちは賛成です。実際、香港には、障害のあるアーティストの才能を伸ばし、自分の作品を売って生活していくことができるようにトレーニングを行う美術学校・施設を運営するリハビリテーション機関があります。

日本のアーティストの田久保妙（たくぼたえ）さん、水上卓哉（みずかみたくや）さんや、今回の作品展の審査員である西村陽平（にしむらようへい）氏を含めたビッグ・アイチームのホスト役を務めることができたこと、私たち一同、非常にうれしく思っております。

香港で1週間にわたって行われた今回の展覧会は、リハビリテーション機関や一般から多くの観客を集めました。また、今後日本の各地を巡回して行われる展覧会に参加するため、数名の香港のアーティストが日本を訪れることになっています。実際に訪問して出会うことで、より人間味があり記憶に残る、深い文化的・芸術的な接触が生まれることから、このような交流は非常に有意義であると思います。また次のビッグ・アイアートプロジェクトでさらなる協力ができることを心から楽しみにしております。

莫昭如 Mok Chiu Yu

社區文化發展中心 総幹事 Chief Executive, Centre for Community Cultural Development

Hong Kong



Exhibition

最後はおおさか!

香港、東京、横浜、金沢を巡り好評を博した展覧会がいよいよ大阪に!
国内外から届いた1,514点もの作品の中から選出された50の入選作品をご紹介します。

ビッグ・アイ アートプロジェクト 入選作品展 共振×響心 日々のカケラ

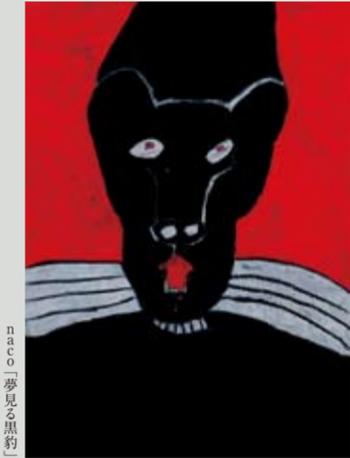
会場 ハービスHALL 小ホール
大阪市北区梅田2-5-25 ハービスOSAKA 地下2階

会期 2016年8月9日(火)～8月13日(土)

時間 11:00～20:00(最終日は15:00まで)

主催 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ) 協力 ハービスHALL

お問合せ
ビッグ・アイ「アートプロジェクト」係
TEL 072-290-0962 FAX 072-290-0972
Eメール museum@big-i.jp
ホームページ <http://big-i.jp/> **ビッグ・アイ** 検索



naoko 夢見る黒豹

※大阪展の展示作品は、受賞・入賞の50作品のみとなります。本紙特集に掲載したマリリン・ウォンさん、竹内知さん、細川陽平さん、高橋雅さんの作品の展示はございません。予めご了承ください。

Information

ぐらん・じゅ ゆうしょく 優食セット リニューアル! 各1,500円

※写真はイメージです



ハンバーグセット



チキンカツセット



さわらの幽庵焼きセット

※全てのセットに「吹寄せ野菜」「スープ」「ライス又はおかゆ」付き。
※摂食支援食としてご用意しているため量は控えめで、スプーンでつぶせるやわらかいお食事です。
優食メニューには「あいと」のメニューを使用しています。

誰もが食事を楽しめる

レストランぐらん・じゅ

7:00～21:00(ラストオーダー 20:30)

席数 50席(全席禁煙)

ご予約・お問合せ

国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)1階

TEL&FAX 072-290-0917

大阪府堺市南区茶山台1-8-1

Present!

プレゼントクイズ

今号の特集記事からの出題です

ビッグ・アイ アートプロジェクト入選作品集
「BiG-i Art Collection 2015」を
10名様にプレゼント!!

10
名様

Q ビッグ・アイアートプロジェクト
入選作品展 共振×響心のサブ
タイトルは何でしょう?

日々の



■応募方法

クイズの答えと下記の必要事項をご記入の上、ハガキ、ファックス、Eメールのいずれかでご応募ください。

①氏名(ふりがな) ②郵便番号 ③住所 ④電話番号 ⑤本紙へのご感想やご希望、ご質問など

正解者の中から抽選で10名様に景品を発送させていただきます。当選者の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。

※読者のみなさまからいただいたご意見を「i-co」紙面でご紹介する場合があります。予めご了承ください。

■応募締切

2016年8月31日(水)消印有効

■応募先

〒590-0115
大阪府堺市南区茶山台1-8-1
ビッグ・アイ「i-coプレゼント」係
FAX 072-290-0972
Eメール i-co@big-i.jp

ご応募の際にお預かりする個人情報については、個人情報保護関係法令を遵守し、本紙の運営・実施の目的以外には使用いたしません。



編集・発行 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)広報
〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL 072-290-0962 FAX 072-290-0972

発行日 2016年7月31日

EVENT CALENDAR

情報保障等のアイコン表示

8 August



9日[火]～13日[土] 各日11:00～20:00(最終日は15:00まで)

ビッグ・アイアートプロジェクト入選作品展 共振×響心 日々のカケラ

▶場所:ハービスHALL 小ホール(ハービスOSAKA 地下2階)

▶無料

▶問合せ アートプロジェクト係 072-290-0962

13日[土] 10:00～14日[日] 12:00

ビッグ・アイアートキャンプ(子どもゆめ基金助成活動)

▶講師:水野浩世(絵画講師とか、作家とか。)

原千草(ものをつくることのこと。造形作家)

上田哲郎(アートスペース垂蛮人)

ジェス・ラウ(アーティスト/香港)

▶場所:ビッグ・アイ研修室ほか

▶参加者の募集は終了。見学自由。

▶問合せ アートキャンプ係 072-290-0962



9 September

1日[木]～25日[日]

ビッグ・アイアートプロジェクト作品募集2016 国内募集作品受付

▶国内外を問わず、障害のある方が制作したアート作品で過去に受賞歴のない作品。

▶無料

▶問合せ アートプロジェクト係 072-290-0962

17日[土]・18日[日]・19日[月・祝]
各日13:30～16:30(予定)



大阪府障がい者芸術・文化フェスタ2016

▶出演:障がい者アーティスト33組(予定)

▶場所:多目的ホール▶無料▶定員:1,200名

▶問合せ フェスタ係 072-290-0962



25日[日] 12:30～15:10



特別企画「大震災と障害者」 「くまもと・福島・東北・阪神淡路の現在(いま)」 ～被災地からの報告とこれからを語り合う～

▶場所:多目的ホール▶1,000円(当日受付にて受領)

▶定員:800名▶申込不要

▶問合せ 大震災と障害者係 072-290-0962

10 October



知的・発達障がい児(者)にむけての劇場体験プログラム 劇場って楽しい!!

23日[日] 13:00～14:00



映画体験「ひつじのショーン」「パンダコパンダ」

▶場所:多目的ホール▶無料

▶申込締切:9月30日(金)▶定員:300名(先着順)

▶問合せ 劇場体験係 072-290-0962

29日[土] 13:00～14:00



コンサート体験「音のつぶコンサート」

▶出演:橋本三千代(ピアノ)、赤城史穂(うた)▶場所:多目的ホール

▶無料▶申込締切:9月30日(金)▶定員:300名(先着順)

▶問合せ 劇場体験係 072-290-0962

Facebookでも様々な情報を発信中です!
<https://www.facebook.com/bigartproject>